

# 日蓮聖人教学における教と行（二）

庵 谷 行 亨

## 一 日蓮聖人教学における教

本稿は「日蓮聖人教学における教と行」について考察するものであり、既に発表した「日蓮聖人教学における教と行（一）」（『日蓮教学研究所紀要』第四六号）を承ける続稿である。前稿では主に仏教における教と行についてその概要を確認した。本稿では主に日蓮聖人教学における教について考察したい。

### 1 天台教学の受容

日蓮聖人（一二二二～一二八二）は、天台宗寺院であった安房国清澄寺の僧侶として出家し、師匠や兄弟子から仏道を学んだほか、さらに幕府が開かれていた鎌倉や伝統的宗教都市であった京畿方面の諸寺院に遊学して修学された。清澄寺・鎌倉諸寺院・京畿諸山な

どで日蓮聖人が学修した具体的内容はわずかなことしか知られていない。しかし、京畿方面の修学の中心は比叡山であったことはまちがいない、それは、後に日蓮聖人が述作された多くの文章が天台宗の教学に立脚していたり天台宗関係の書籍が多く引用されていることから理解される。日蓮聖人の仏教受容の基礎は天台宗の教えによつて形成されていたと言つても過言ではない。

建長五年（一二五三）、諸国の諸寺院を巡つて修学し終わった日蓮聖人は清澄寺に帰り、一二歳の清澄登山から三二歳の諸山遊学にいたる二〇年間にわたる仏道研鑽の成果を清澄寺の人々に報告した。<sup>1</sup>

釈尊の真意を求めて出家し求道の日々を重ねてきた日蓮聖人にとつて、それはまさに信仰的信念の表白であったのである。後に日蓮教団において立教開宗と称されるこの発表は、法華経こそ釈尊の出世の本懐の教えであるとの確信に基づいたものであった。それは、

当時の清澄寺で実修されていた法華経信仰とは異なるものであったことは、法華経信仰の確信を述べた直後に、日蓮聖人が清澄寺の有力者であった地頭の東条景信から敵対視され、師匠の道善房から勘当されて清澄寺を退出しなければならなかったことから理解される。

日蓮聖人は信仰確信の当初から、当世通途の天台宗とは異なる法華経信仰の道を辿ることになったのである。しかしそれは、日蓮聖人にとって、釈尊から天台大師・伝教大師そして自身へと繋がる正統なる法華経信仰の系譜を継承するものであった。

建長六年(一二五四)頃と考えられている蓮長から日蓮への改名は、日蓮聖人が法華経説会の釈尊にまみえ、見宝塔品から從地涌出品・如来寿量品を経て如来神力品にかけての虚空会説法を謹んで聴聞し、釈尊が発せられた滅後弘経の勅命を全身全霊をかけて蒙りかつ誓った本化地涌菩薩でなければならぬことであった。日蓮の日は如来神力品所説の「如日月光明」、蓮は從地涌出品所説の「不染世間法如蓮華在水」であり、共に本化地涌菩薩を譬えたものである。

すなわち、日蓮聖人の求道と弘法は、単に釈尊の仏道を知るためではなく、釈尊の真意に立脚した仏道を実現することであったのである。したがって、求道者日蓮は同時に弘法者日蓮として立ち上がらなければならなかったのである。『開目抄』における、日蓮聖人の「二辺の中にはいうべし」という「しれる者」としての忍難慈勝<sup>(3)</sup>

の決断は、同じく『開目抄』に「本願を立<sup>と</sup>つ」とあるがごとく、この建長五年の信仰表白と日蓮の命名の折の心境を指すものであったと思われるのである。

このように、きわめて実践的な志向のなかで出発した日蓮聖人の宗教は、漢土以来の伝統的な天台教学に立脚しつつ、本門寿量品を中心とした法華経信仰に基づく神力品別付嘱の自覚のなかで実修されていったのである。

教を視点として日蓮聖人の天台教学の受容を考えると、その中心となるものは教相である。日蓮聖人教学において重視される天台教学の教相には主に五時八教と三種教相および五重玄義がある。

#### (1) 五時八教

五時八教は釈尊一代の仏教を五時に配置してその内容を説明したもので、法華経を中心とした仏教の体系を明らかにしている。日蓮聖人はこの教判に基づいて仏教を受け止められた。日蓮聖人の法華最勝の教判は五時八教を基盤としながら、さらに末法の視点から本門の奥旨を信受するなかに樹立されたものである。

門下教育のための図表と思われる一連の『一代五時図』は五時八教に立脚して表記されている。ただし、五時八教は法華経を中心に一代聖教における諸経の位置づけを明らかにするもので、その教旨は主に権実論である。日蓮聖人の本化教学の教相の本旨からすると前段階の役割を持つものである。

#### (2) 三種教相

三種教相は天台大師の『法華玄義』卷一<sup>(5)</sup>に説かれる教相で、根性の融不融の相・化道の始終不始終の相・師弟の遠近不遠近の相をいう。

根性の融不融の相は法華經方便品第二から授記品第六にわたる法説周・譬説周所説の教えに立脚し、機の根性が一乘真実の教法に対応できるか否かを基準としたものである。爾前諸經は根性不融のゆえに調機調熟のための方便權經、法華經は根性融熟のゆえに釈尊出世の本懷である一乘真実經が説かれたとする。

化道の始終不始終の相は法華經化城喻品第七の教えに立脚し、仏の衆生教化の始終の有無を基準としたものである。爾前諸經は衆生教化の始終を説かないゆえに化導に一貫性がなく利益に実を欠き、法華經は種・熟・脱の三益を明かすゆえに化導に一貫性があり利益に実があるとする。

師弟の遠近不遠近の相は法華經如來壽量品第十六の教えに立脚し、師弟関係の久近を基準としたものである。爾前諸經においては教主(師)は始成正覺の仏であり教化を受けた弟子も有限であるが、法華經においては教主(師)は久遠実成の仏であり教化を受けた弟子も久遠結縁者である。すなわち爾前諸經は師弟共に始成、法華經は師弟共に久遠であることから、法華經は真実の教えであるとする。

日蓮聖人は五時八教とともに三種教相によって法華經の優位性を説くが、末法の法門は法華經本門にあるとして、とくに三種教相の

第三師弟の遠近不遠近の相を重視された。『富木入道殿御返事』には次のように述べられている。

法華經与<sub>レ</sub>爾前引向判<sub>二</sub>勝劣淺深<sub>一</sub>当分跨節の事有三様。日蓮が法門は第三の法門也。世間粗如<sub>レ</sub>夢一二をば申ども、第三不<sub>レ</sub>申候。第三法門は天台・妙楽・伝教も粗示<sub>レ</sub>之末<sub>二</sub>事了<sub>一</sub>。所詮讓<sub>二</sub>与末法之今<sub>一</sub>也。五々百歳は是也。<sup>(6)</sup>

法華經が、流布必然の正時と説く「五々百歳」とは「末法之今」であるとし、その「今」に弘通すべき「日蓮が法門」は「天台・妙楽・伝教」も「未事了」の「第三の法門」であるとされている。本門壽量品は教主の久遠実成を開顯することによって弟子の久遠教化の真実性を明らかにする。師弟久遠は久遠結縁をとおして化導の過程と利益の事実を明示するものである。

教主の久遠開顯は所説の教法と所居の浄土の久遠開顯でもある。したがって、本門壽量品は、本師―久遠実成の仏―本門の教主釈尊、本弟子―久遠教化の弟子―本化地涌菩薩(本化上行菩薩)、本法―是好良薬(久成の法)―要法の法華經(題目)、本土―娑婆浄土―常寂光土(本時娑婆世界)を同時に開顯したものと見える。それは久遠師の久遠法を久遠弟子が受持弘通して常寂光土を実現するという法華經世界の顯現を意味する。日蓮聖人はこのような理念に立脚して「第三の法門」を認識されていたのではないかと思われる。

### (3) 五重玄義

五重玄義は天台大師が諸經の題名を釈する五種の項目で釈名・弁

体・明宗・論用・判教をいう。釈名は經典の名(經題)を釈すること、弁体は經典の体(本質)を弁ずること、明宗は經典の宗旨(教旨)を明らかにすること、論用は經典の用き(効用)を論ずること、判教は經典の教相(教の意義)を判ずることである。天台大師は五重玄義によって諸經典を解釈したが、なかでも法華經を釈した『法華玄義』が著名である。日蓮聖人は『法華文句』『摩訶止観』とともに法華經領解の基本文献とされた。

『法華玄義』は通釈において七番共解<sup>⑦</sup>、別釈において五重各説を説く。通釈は標章・引証・生起・開合・料簡・観心・会異において名・体・宗・用・教の五重玄義を解説する。別釈では名・体・宗・用・教の五重玄義を個別に解説している。『法華玄義』卷一に説かれる七番共解の第二引証では五重玄義の典拠を序品の文に求めている<sup>⑧</sup>。

『法華文句』においては如来神力品の四句要法を挙げて、「如来一切所有之法」は三千の諸法にして「妙名」、「如来一切自在神力」は如来の大用にして「妙用」、「如来一切秘要之藏」は諸法実相にして「妙体」、「如来一切甚深之事」は実相の因果にして「妙宗」、「皆於此經宣示顯説」は一經の総結にして「妙經」であるとしている<sup>⑨</sup>。

日蓮聖人は如来神力品の四句要法を題目と受けとめられた。『法華取要抄』には次のように述べられている。

日蓮捨「広略」好「肝要」。所謂上行菩薩所伝妙法蓮華經五字也。

天台大師が如来神力品の四句要法をとおして法華經を五重玄義と

釈したの対し、日蓮聖人は如来神力品の四句要法を上行菩薩に付嘱された題目であると受け止められた。

さらにこれに重ねて、天台大師の五重玄義は四句要法であることから題目にほかならないとされた。『曾谷入道殿許御書』には次のように述べられている。

爾時大覺世尊演說壽量品。然後示現於十神力。付屬於四大菩薩。其所屬之法何物乎。法華經之中捨レ広取レ略捨レ略取レ要。所謂妙法蓮華經之五字名体宗用教五重玄也。<sup>⑩</sup>

如来神力品における結要の法は題目であるとして、これがすなわち天台大師の五重玄義であるとされている。

また、『観心本尊抄』には次のように述べられている。

是好良藥壽量品肝要名体宗用教南無妙法蓮華經是也。<sup>⑪</sup>

壽量品の「是好良藥」は「壽量品の肝要たる五重玄義の南無妙法蓮華經」であるとされている。日蓮聖人は法華經壽量品の視点から五重玄義を意義付け、壽量品の「是好良藥」は五重玄義であり題目であると見做されたのである。

さらに『曾谷入道殿許御書』には次のように述べられている。

夫以療治重病。構索良藥。救逆逆謗。不レ如要法。<sup>⑫</sup>

末代の衆生は「逆謗」の重病者であるゆえに「要法」(題目)という良薬が必要であるとの救済論が展開されている。

以上のとおり、日蓮聖人は天台大師の五重玄義・四句要法釈などに立脚して、題目の意義を論証されている。

このように、日蓮聖人は、日本天台教学よりも天台大師・章安大師・妙楽大師などの中国天台教学に立脚して末法相應の独自の教学を樹立していかれたのである。

## 2 本門教学

### (1) 本門の一念三千

日蓮聖人は、末法時の視点に立ち本門に立脚して法華經を受容したことから、天台大師の教学を超越したとの自覚を持たれた。文永八年（一二七一）五月に三位房に送られた『十章鈔』には次のように述べられている。

一念三千と申事は迹門にすらなを許されず。何況爾前に分たえたる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども、義分は本門に限。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真實の依文判義は本門に限べし。<sup>⑬</sup>

一念三千法門について、爾前・迹門・本門の比較をとおして本門に真實義があると教示されている。「真實の依文判義」が「本門に限」とは、文義の真實は本門にのみあるとの意である。

『開目抄』には次のように述べられている。

一念三千の法門は、但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。一念三千は十界互具よりこととはじまれり。<sup>⑭</sup>

『開目抄』は、龍口法難の危機を脱して佐渡に流罪された日蓮聖人が、死の危機感のなかで、門下に形見として残された「一期の大<sup>⑮</sup>事」である。「法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり」との表現をとおして、本門の教相を觀心として表明されたものである。言わば觀心本門とも言うべき得意な法門教示である。ここにおいて、日蓮聖人は天台大師の教学体系を超越した独自の本門教学の境地を示されたのである。一念三千が十界互具から「ことはしま」との受け止め方は、天台教学の十如実相を基盤とする真如理法の一念三千觀とは異なり、十界の衆生の救いへと視点が移っている。一念三千を十界互具を視点に論究し釈尊の救いを論証されるのは『觀心本尊抄』であることから、同じ佐渡における教義書としての両書の關係性が伺われる。『觀心本尊抄』の教学理念を背景に考えると、『開目抄』に「文底の一念三千」と表現するなかに、本門の事行を意図されたのではないかとも思われるのである。

さらに『開目抄』には次のように述べられている。

迹門方便品は、一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の



仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。<sup>⑮</sup>

本門寿量品の発迹顕本に仏教の真実義を見るものである。これを「本門十界の因果をとき顕」した「本因本果の法門」であるとし、ここに無始仏界具九界・無始九界具仏界が成就し「真の十界互具・百界千如・一念三千」が実現するとされている。先の文底の一念三千に続いて、発迹顕本に立脚した日蓮聖人独自の本門教学が披瀝されている。

本門教学の基幹である一念三千について、台当の分別を明確に教示されているのは弘安元年(一二七八)六月の『富木入道殿御返事』である。

一念三千観法に二あり。一理、二事なり。天台・伝教等の御時には理也。今は事也。観念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門一念三千也。天地はるかに殊也こととと、御臨終の御時は御心へ有るべく候。<sup>⑯</sup>

「一念三千観法に二あり」として、天台・伝教等の御時は迹門の一念三千で理、今(末法今時)は本門の一念三千で事であるとし、両者は「天地はるかに殊也ことと」とされている。両者の相違を「観念すでに勝る故、大難又色まさる」とし、末法今時の本門の一念三千は大難と共にあるとされている。末法時の法華経(題目)弘通に大難が伴うことは法華経に繰り返し説き示されている。日蓮聖人は値難覚悟の決意のなかで法華経に立ち上がり、伊豆流罪・佐渡流罪

を体験するなかで、法華経勸持品の色説を完遂された。

すなわち台当における一念三千の相違は滅後像末・理事・迹本であるが、その本質的な問題は法難の大小、すなわち受持弘通の難易にあるのである。

## (2) 五義

日蓮聖人の本門教学を体系づける法門が五義である。五義は日蓮聖人における自覚・実践と弘教の方軌を示されたものである。従来、五綱の教判と称し、日蓮聖人における本化の教判と理解されてきたが、五義は単なる教判の範疇に止まるものではない。佐渡期以降においては、序が師と表現されることから、五義には日蓮聖人の弘教者としての自覚と使命感が濃厚に表明されている。したがって、五義は日蓮聖人の宗教的主体性のなかで体系づけられた法門であると言うことができる。

五義が表明された遺文は、佐前においては伊豆流罪中の『教機時国鈔』<sup>⑰</sup>、『顕謗法鈔』<sup>⑱</sup>および文永元年(一二六四)の『南条兵衛七郎殿御書』<sup>⑲</sup>、佐後においては佐渡流罪中の『観心本尊抄』<sup>⑳</sup>および身延期の『曾谷入道殿許御書』<sup>㉑</sup>、『瀧泉寺申状』<sup>㉒</sup>などがある。佐前においては教機時国序、佐後においては教機時国師と表現されている。このことから佐前は教相的五義、佐後は行法的五義の表明であると言えよう。

五義は、日蓮聖人が釈尊の意思として受得した法華経(題目)流布の必然を示すものである。したがって、それは教に投身した日蓮

聖人の信仰的主体において領解された本化仏教の体系である。

### (3) 三大秘法

日蓮聖人教学の本旨は三大秘法である。日蓮聖人は一念三千の教学原理に基づいて本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇の三大秘法を「末法の法華經」に聞信されたのである。

三大秘法について叙述された代表的遺文は次のとおりである。

#### ①『観心本尊抄』

『観心本尊抄』は文永一〇年（一二七三）四月二五日に、配流の地である佐渡国一谷で、檀越の富木常忍・太田常明・曾谷教信等の門下に宛てて執筆された日蓮聖人の最重要教義書である。

『観心本尊抄』は、文脈上では本門の題目・本門の本尊を論じ、文裏において本門の戒壇を密示されたものとされている。<sup>(23)</sup>

#### ②『法華行者値難事』

天台・伝教宣<sub>レ</sub>之本門本尊与四菩薩戒壇南無妙法蓮華經五字残<sub>レ</sub>之。所詮一仏不<sub>二</sub>授与<sub>一</sub>故二時機未熟故也。今既時来。四菩薩出現歟。日蓮此事先知<sub>レ</sub>之。<sup>(25)</sup>

『法華行者値難事』は文永一二年（一二七四）正月一四日に、四条金吾・富木常忍・河野辺入道・大和阿闍梨・一切弟子中へ宛てられたもので、佐渡期最後の頃の遺文である。赦免状が一月後の二月一四日に発せられ三月八日に佐渡に届けられた。日蓮聖人は三月一三日に佐渡を發ち二六日に鎌倉に帰還された。『法華行者値難事』は佐渡期を結する書面と言えよう。

天台・伝教未宣の大法として「本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字」を挙げ、末法今時に四菩薩が出現して弘宣するとされている。『観心本尊抄』所説の「当身の大事<sup>(26)</sup>」である「観心の法門<sup>(27)</sup>」をより具体的に表明し、その広布者を神力品別付の四菩薩とされている。

#### ③『法華取要抄』

問云如来滅後二千年龍樹・天親・天台・伝教所<sub>レ</sub>残秘法何物乎。答曰本門本尊与戒壇与題目五字也。<sup>(28)</sup>

『法華取要抄』は文永一一年（一二七四）五月二四日に富木常忍に宛てられたものである。日蓮聖人が身延に入山されたのは五月一七日のことであるから、身延に到着直後、波木井の館で筆を執られたものと考えられている。また、身延山久遠寺第一二世日意（一四四四〜一五一九）の『大聖人御筆目録』には「法花取要抄 初ノ三枚メヨリ二枚計不足<sup>(29)</sup>」、「以一察萬抄 法花取要抄ノ事也 一帖<sup>(30)</sup>」とあることから、『法華取要抄』には二篇の草案があったことが知られている。<sup>(31)</sup> すなわち『法華取要抄』は既に佐渡で草案が作成されていたと考えられ、成立過程と法門教示について、文永九年の『開目抄』、文永一〇年の『観心本尊抄』、文永一一年の『法華行者値難事』に連なる遺文として総体的に把握する必要があると思われる。

龍樹・天親・天台・伝教所残の秘法について問う文を受けて、「本門本尊与戒壇与題目五字也」と本門本尊・本門戒壇・本門題目の三大秘法を挙げられている。

#### ④『法華取要抄』

如<sub>レ</sub>是乱<sub>二</sub>国土<sub>一</sub>後出<sub>二</sub>現上行等聖人<sub>一</sub>本門三法門建立<sub>二</sub>之一<sub>一</sub>四天  
四海一同妙法蓮華經広宣流布無<sub>レ</sub>疑者歟<sup>②</sup>。

「国土混乱の後」に「上行等の聖人」が出現して「本門の三法門」を建立し「一四天四海一同」に「妙法蓮華經」の題目を広布するとは「無疑」とされている。「国土混乱の後」は、時・機・国、「上行等の聖人」は能弘の師、「本門の三法門」は所弘の法を示している。『法華行者値難事』で「四菩薩」とされていた能弘の師が「上行等の聖人」とさらに特化されている。③の「秘法」「本門本尊与戒壇与題目五字」がここでは「本門の三法門」と表現されている。「本門本尊与戒壇与題目五字」が末法の「秘法」である「本門の三法門」であることを意味している。『法華行者値難事』と③では先師が「宣べず」「残」したとする「秘法」を、ここでは「上行等の聖人」が出現して「建立」「広宣流布」とすると表現されている。日蓮聖人にとって、「本門の三法門」「妙法蓮華經」は「建立」「広宣流布」として、「本門の三法門」「妙法蓮華經」は「建立」されることにおいて「広宣流布」が実現することと意味している。このことは『観心本尊抄』の次の文と共通している。

像法中末観音藥王示<sub>二</sub>現南岳天台等<sub>一</sub>出現以<sub>二</sub>迹門<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>面以<sub>二</sub>本門<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>裏百界千如一念三千尽<sub>二</sub>其義<sub>一</sub>。但論<sub>二</sub>理具<sub>一</sub>事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊末<sub>二</sub>広行<sub>一</sub>之。所詮有<sub>二</sub>円機<sub>一</sub>無<sub>二</sub>円時<sub>一</sub>故

也。<sup>③</sup>

像法の中末に出現した南岳・天台等は迹面本裏の一念三千で、それは「理具」を論じたにすぎない。今末法時は本面迹裏の一念三千で、それは「事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊を広く行」じることであるとされている。

『法華取要抄』の「建立」「広宣流布」は『観心本尊抄』の「事行」「広く行」じるに当たる。すなわち「本門の三法門」である三大秘法は、末法今時において、上行等の本化菩薩によって具体的に実践し建立されるべき実現の法門である。

#### ⑤『報恩抄』

問云、天台伝教の弘通し給ざる正法ありや。答云、有。求云、何物乎。答云、三あり。末法のために仏留置給。迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をさらはず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし。此事いまだひろまらず。一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声をしまず唱るなり。<sup>④</sup>

『報恩抄』は建治二年（一二七六）七月二一日に、かつての師匠



であつた道善御房への追悼と報恩廻向のために身延山で述作されたものである。浄顕房・義城房宛であることから清澄の住僧に対する教化の意図をも含んでいた。三大秘法の教示は、日蓮聖人遺文中ではもっとも具体的に述べられている<sup>⑤</sup>。

天台・伝教未弘の正法として本門本尊・本門戒壇・本門題目について述べられている。三大秘法を挙げて「此の事」は「いまだひろまらず」「一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず」と未弘・未唱を強調した後に、「日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声もをしまず唱るなり」とされている。三大秘法が未弘であることを受けて「南無妙法蓮華經」は未唱であると考えられている。このことは三大秘法が「南無妙法蓮華經」(一大秘法)であることを意味している。日蓮聖人においては一大秘法は三大秘法に開示され三大秘法は一大秘法に結ばれるのである。「日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等」と「声もをしまず唱る」とは、末法弘通における値難の義を示し、忍難慈勝を意味する。日蓮聖人における唱題は題目の色読であり、題目の実現であつた。

本門の本尊に帰依し本門の題目を唱え本門の戒壇を現成するところに、三大秘法が実現し、立正安国が顕現する。日蓮聖人はその目標に向かって生涯にわたって法華經(題目)弘通に生きたのである。

#### (4) 観心の教

日蓮聖人教学における代表的な教相は『開目抄』の五重相對と『観

心本尊抄』の四種三段である。

#### (一) 五重相對

『開目抄』には次のように述べられている。

一代五十余年の説教は外典外道に對すれば大乘なり。大人の実語なるべし。初成道の始より泥洹の夕にいたるまで、説ところの所説皆真実也。但仏教に入て五十余年の経々八万法藏を勸たるに、小乗あり大乘あり、權經あり実經あり、顯教密教、軟語龜語、実語妄語、正見邪見等の種々の差別あり。但法華經計教主釈尊の正言也。三世十方の諸仏の真言也。大覺世尊は四十余年の年限を指て、其内の恒河の諸經を未顯真実、八年法華は要當說真実と定給しかば、多宝仏大地より出現して皆是真実と証明す。分身の諸仏來集して長舌を梵天に付く。此言赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし。仰て信ぜよ。伏て懷べし。但此經に二十の大事あり。俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもらさず。華嚴宗真言宗との二宗は偷に盜で自宗の骨目とせり。一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。<sup>⑥</sup>

「二代五十余年の説教」以下からは内外相對、「但仏教に入て」以下からは大小相對、「但法華經計」以下からは權実相對、「但法華經の本門寿量品」は本迹相對、「文の底にしづめたり」は教觀相對で

ある。

教観相対における「法華経の本門寿命品の文の底にしづめたり」は文底観心を示すものである。「法華経の本門寿命品の文」は本門の教、「法華経の本門寿命品の文の底」は本門寿命品の内証（文底観心）である。内証の受得は「法華経の本門寿命品」を観心として受領することである。本門の教は久遠釈尊の題目五字（観心の教）、本門の観心は信行者の題目七字（受持の観）となる。教と観は相即して不二であることにおいて教であり観であることから、教は信行者の観において教となり、観は釈尊の教において観となる。したがって題目の五字は七字において五字であり、題目の七字は五字において七字である。すなわち題目は「五字七字」において題目となるのである。

## (二) 四種三段

『観心本尊抄』には次のように述べられている。

法華経一部八卷二十八品進前四味退涅槃経等一代諸経惣括之但一経也。始自寂滅道場終至于般若経序分也。無量義経・法華経・普賢経十卷正宗也。涅槃経等流通分也。正宗於十卷中亦有序正流通。無量義経並序品序分也。自方便品至于分別功德品十九行偈十五品半正宗分。分別功德品自現在四信至于普賢経十一品半一卷流通分也。又於法華経等十卷有二経。各具序正流通也。無量義経序品序分。自方便品至于人記品八品正宗分。自

法師品至于安樂行品五品流通分。論其教主始成正覺仏。説本無今有百界千如超過已今當隨意難信難解正法也。尋過去結縁大通十六之時下仏果下種進者以華嚴経等前四味為助縁令覺知大通種子。此非仏本意。但毒發等一分也。二乗・凡夫等前四味於縁漸々來至法華顯種子遂開顯機是也。又於在世始聞八品人天等或聞一句一偈等為三種或熟或脱或至普賢涅槃等或正像末等以小權等為縁入法華。例如在世前四味者。

又本門十四品一経有序正流通。涌出品半品為序分。寿命品前後二半此為正宗。其余流通分也。論其教主非始成正覺釈尊。所説法門亦如天地。十界久遠之上国土世間既顯一念三千殆隔竹膜。又迹門並前四味・無量義経・涅槃経等三説悉隨他意・易信易解。本門三説外難信難解・隨意也。

又於本門有序正流通。自過去大通仏法華経乃至現在華嚴経乃至迹門十四品・涅槃経等一代五十余年諸経十方三世諸仏微塵経々皆寿命序分也。自一品二半之外名小乗教・邪教・未得道教・覆相教。論其機德薄垢重幼稚貧窮孤露同禽獸也。

「法華経一部八卷二十八品」からは「一代三段」、「正宗於十卷中」からは「十卷三段」、「又於法華経等十卷」からは「二門六段になり」「無量義経序品序分」からは「迹門三段」「又本門十四品一経」からは「本門三段」、「又於本門有序正流通」からは「本法三段である。

本法三段では、「十方三世諸仏の微塵の経々」を「寿命」の序分

とし、「一品二半」以外は「小乗教・邪教・未得道教・覆相教」であるとされている。「一品二半」は本門正宗分であるため教相的であるが「寿量」は教相の観心的表現である。同じく『観心本尊抄』に「我内証寿量品<sup>(38)</sup>」、「寿量品肝心以妙法蓮華經五字<sup>(39)</sup>」とあることから、「寿量」は「内証の寿量品」「寿量品の肝心たる妙法蓮華經五字」を意味するものと思われる。

『観心本尊抄』では次下に次のように述べられている。

爾前迹門円教尚非二仏因。何況大日經等諸小乘經。何況華嚴・真言等七宗等論師人師宗。与論之不<sub>レ</sub>出前三教。奪云之同<sub>二</sub>藏通<sub>一</sub>。設法称<sub>二</sub>甚深<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>論種熟脱。還同<sub>二</sub>灰断<sub>一</sub>。化無<sub>二</sub>始終<sub>一</sub>是也。<sup>(40)</sup>

化導の三益を論じ、「爾前迹門」は「非二仏因」にして「不<sub>レ</sub>出前三教」「同<sub>二</sub>藏通<sub>一</sub>」であることから「還同<sub>二</sub>灰断<sub>一</sub>」の教えであるとされている。さらに時・機を論じて「再往勸<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>凡夫・正・像・末<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>正<sub>一</sub>。正・像・末三時之中以<sub>二</sub>末法始<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>正中<sub>一</sub>正<sub>二</sub>」<sup>(41)</sup>、「以<sub>二</sub>本門<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>之一向以<sub>二</sub>末法之初<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>正機<sub>一</sub>」<sup>(42)</sup>と「寿量」「一品二半」は末法初時為正・末法機為正の教えであるとする。

こうして次のように種脱について論を展開されている。

本門序正流通俱以<sub>二</sub>末法之始<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>詮。在世本門末法之初一同純円也。但彼脱此種也。彼一品二半此但題目五字也。<sup>(43)</sup>

本門の法門は「以<sub>二</sub>末法之始<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>詮」とし、「在世本門」と「末法之初」は「一同に純円」であるが、「在世本門」は「脱」で「一品

二半」、「末法之初」は「種」で「但題目の五字」であるとされている。すなわち「教相の一品二半」と「観心の題目五字」は、法体においては「一同に純円」、在末の相對においては、「教相の一品二半」は脱益、「観心の題目五字」は下種となる。したがって末法は題目を以て下種とする。ただし法体においては「一同に純円」であることから、「教相の一品二半」と「観心の題目五字」に勝劣はない。本法三段で「寿量」と「一品二半」を正宗分とされたのはその意である。

#### (5) 本門教学の体系

日蓮聖人における教学（本門教学・本化教学）の体系の要点はおよそ次のように考えることができるであろう。

本仏は本門の教主釈尊（発迹顕本の仏）、本法は本門の題目（南無妙法蓮華經）、本土は常住の浄土（本時娑婆世界）、本弟子は本化上行菩薩（塔中別付の菩薩）。

時期は末法今時（末法の初め）、機根は末代幼稚（末法の名字凡夫）、国土は法華經有縁の土（閻浮提）、導師は本化地涌菩薩（上行菩薩の自覚者日蓮聖人）。

本旨は題目南無妙法蓮華經（一大秘法）、原理は一念三千（本門寿量品文底の一念三千）、証果は釈尊因果の自然讓与（自然益身・即身成仏・靈山往詣）。

具体的信行は三大秘法（本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇）。本門の本尊は久遠実成の教主釈尊（本門寿量品の仏）、本門の題目

は南無妙法蓮華經の五字七字（題目五字七字）、本門の戒壇は題目受持の道場（本門妙戒受持の道場）の顯現。

目標は立正安国の実現、救いの世界は本時娑婆世界（所化以同体の感応道交の境地・本門の教主釈尊の世界・大曼荼羅世界）。

以上は主に教の視点からの検討である。日蓮聖人教学を総体的に理解するためには、さらに行の視点からの考察が必要であることは言うまでもない。その点については紙面の都合上別稿としたい。

## 註

(1) 『清澄寺大衆中』には「建長五年四月二十八日、安房国東條郷清澄寺道善之房持仏堂の南面にして、淨円房と申者並に少々大衆にこれを申しはじめて、其後二十余年が間退転なく申」(『昭定』一一三四頁・曾)と述べられている。

(2) 「日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出ずならば父母・兄弟・師匠国王王難必來べし。いわずば慈悲なきにいたりと思惟するに、法華經・涅槃經等に此二辺を合見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔必競起るべしとし(知)ぬ。二辺の中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくは一度に思止べし、と且やすらい(休)し程に、宝塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須弥山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒沙の経々をばよみをばうとも、法華經は一句一偈末代に持がたとし、とかる、は

これなるべし。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。『昭定』五五六―五五七頁・曾。

(3) 忍難慈勝の語句は『開目抄』の次の文章による。「今末法の始二百余年なり。況滅度後のしるし(兆)に闘諍の序となるべきゆへに、非理を前として、濁世のしるし(驗)に、召合せられずして流罪乃至寿にもをよばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだしぬべし。定て天の御計にもあづかるべしと存ずれども、一分のしるし(驗)もなし。いよいよ重科に沈。還て此事計みれば我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此国をすて、去給るか。かたがた疑はし。『昭定』五五九頁・曾。さらに『報恩抄』の次の文章を参照。「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし。日本国は一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は伝教天台にも超へ、龍樹・迦葉にもすぐれたり。『昭定』一二四八―一二四九頁・曾・断。

(4) 「詮するところは天もすて給、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫菩薩行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪ざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ゆへなり。善に付け悪につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。本願を立つ。日本国の位をゆづらむ、法華經をすて、觀經等について後生を(期)せよ。父母の頸を刎、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我義やぶられずば用じとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とな

らむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず」。『昭定』六〇一頁・曾。

- (5) 『正蔵』第三三卷六八三頁b。
- (6) 『昭定』一五八九頁・真。
- (7) 『正蔵』第三三卷六八四頁a。
- (8) 『正蔵』第三四卷一四二頁a～b。
- (9) 『昭定』八一六頁・真。
- (10) 『昭定』九〇二頁・真。
- (11) 『昭定』七一七頁・真。
- (12) 『昭定』八九五頁・真。
- (13) 『昭定』四八九頁・真。
- (14) 『昭定』五三九頁・曾。
- (15) 『昭定』五六一頁・曾。
- (16) 『昭定』五五二頁・曾。
- (17) 『昭定』一五二二頁・真。
- (18) 『昭定』二四一～二四五頁。
- (19) 『昭定』二六三～二七三頁・曾。
- (20) 『昭定』三一九～三二五頁・断。
- (21) 『昭定』七一八～七二〇頁・真。
- (22) 『昭定』八九五頁・真。
- (23) 『昭定』一六七八頁・真。
- (24) 山川智應著『観心本尊抄講話』八〇頁。望月欽厚著『日蓮聖人御

遺文講義』第三卷五六～五八頁。

- (25) 『昭定』七九八～七九九頁・真。
- (26) 『観心本尊抄副状』『昭定』七二二頁・真。
- (27) 『観心本尊抄副状』『昭定』七二二頁・真。
- (28) 『昭定』八一五頁・真。
- (29) 『昭定』二七四二頁。
- (30) 『昭定』二七四三頁。
- (31) 都守基一稿『法華取要抄』の草案について『大崎学報』第一五四号。
- (32) 『昭定』八一八頁・真。
- (33) 『昭定』七一九頁・真。
- (34) 『昭定』一二四八頁・断・曾。
- (35) 遺文中では『三大秘法鈔』がもつとも具体的に記載されているが、真偽に議論があることから暫く置く。
- (36) 『昭定』五三八～五三九頁・曾。
- (37) 『昭定』七二三～七四四頁・真。
- (38) 『昭定』七一五頁・真。
- (39) 『昭定』七一六頁・真。
- (40) 『昭定』七一四頁・真。
- (41) 『昭定』七一四～七一五頁・真。
- (42) 『昭定』七一五頁・真。
- (43) 『昭定』七一五頁・真。



一 日蓮聖人遺文は立正大学日蓮教学研究研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』(身延山久遠寺発行)による。

二 日蓮聖人遺文の真蹟・写本等については次のとおり表記した。

真 真蹟現存遺文

曾 真蹟曾存遺文

断 真蹟断片現存遺文

三 引用書名の略称は次のとおり表記した。

『昭定』『昭和定本日蓮聖人遺文』

『正藏』『大正新脩大藏經』

〈キーワード〉日蓮聖人教学、天台教学、本門教学、教、行、観、五義、三  
大秘法

冒頭に記したとおり、本稿は、「日蓮聖人教学における教と行」について考察するものである。全体を三回に分けており、ここでは主に日蓮聖人教学における教について述べた。今後、引き続き別稿において日蓮聖人教学における行について検討したい。